

〔特別レポート〕

アジア発信レポート—その2・中国

耳を鍛える上海の初等教育

～国際コンクールを席卷する中国パワーの源

レポート◎牛田 敦氏 (当協会支持会員・上海在住)

幼稚園児対象のコンクールに 1,700名が参加！

2005年4月、中国上海市において上海音楽学院および東方少儿頻道(テレビ局)が主催する「第2回上海市琴童幼兒鋼琴電視大賽」が開催された。上海市全域から約1,700名の幼稚園児が参加し、年少・年中・年長の部ごとに審査され、牛田智大(5歳)が年中の部で優勝した。

審査は、予選、本選いずれも非公開で、決戦のみ別室で視聴できた。課題曲はなく、自由曲2曲で行われ、年少がP T N AのA2からA1級、年中がA1からB級、年長がA1級からC級レベルが選曲されていた。年少、年中、年長とあがるごとに、演奏のレベルが確実にあがっていき、この年代の子供たちの1年の成長がとても大きいことが伺えた。弾き始めの集中力、音を聴こうとする姿勢、そして気迫は全員に共通しており、曲の難易度にかかわらずよく響くクリアな音で演奏していた子に高得点があがっていた。

まず母親がピアノを習う、その心は？

2歳のとき師事した上海音楽学院出身の陳融樂先生は、まず母親に教え、それをみていた子どもが興味をもつのを確認してから子供への指導をはじめられた。子供がどんなに稚拙に弾いても誉めちぎられ、表現を使い分けることや移調することを遊びながら指導された。

半年後、陳先生のご紹介で、門下生からたくさんの国内外コンクール入賞者が輩出しておられる上海音楽学院名誉教授の鄭曙星先生に師事した。入門時に「テクニックは教えれば身につくが、音楽性のもつてうまれたもの」とおっしゃられ、音楽性を特にチェックされた。

レッスンでは、弾き始めとフレーズごとの腕の使い方から始まり、集中して音を聴くこと、先生の出すよく響くクリアな

音を真似して弾くこと、その音をつなげるレガートが順に要求されるようになった。「正しい音の響きがでていれば自然に脱力が伴い、指の形も成長するにつれ正しくなる。指の形から入ると、力が入ってしまい、あとで脱力させようと思ってもなかなかできない。」と繰り返された。

レッスンの95%が「音の響き」のチェック

「子供が小さいうちはたくさんの曲を弾かせる。常に新鮮な新しい曲をたくさん与え、譜読みと練習そして暗譜をたくさんさせることが大事。スケール・アルペジオをたくさんする。ハノンのようなものは子供には退屈だからさせない。」とおっしゃり、スタカートや付点が付いている小曲からはじまり、バイエル、ツェルニー第一過程練習曲、ツェルニー30番練習曲、ソナチネをメインに、トンプソン、カバレスキー、ブルクミュラー、グリーグ、チャイコフスキー等の曲集から曲を選ばれた。肩や腕に力が入ってくるとスローなやさしい曲を宿題にだし、響きのない音を弾きだすとバツハをかならず宿題にだされた。いずれの曲も、美しい曲で、新しい曲をもらうのを子供が楽しみにするよう導いてくださった。

曲想は間違っていなければそれほど要求は多くなく、レッスンの95%が音の響きのチェックに費やされる。レッスンは基本的に子供に対してなされるが、親の理解、やる気を促すことにも力が注がれ、親が家でフォローすることが前提とされる。



▶2歳の時に師事した陳融樂先生と。



左) 審査員の先生、司会者、年中の部上位入賞者と。手前右端が智大君。



【教授インタビュー】

鄭曙星先生
上海音楽院名誉教授

---先生は、国内および国際コンクールで賞をとられたたくさんの生徒を、本当に小さい頃から直接教えておられます。賞をとれるほどになるまでの道程を見据えたとき、導入期からソナチネアルバムを弾くくらいの子供を教育する時期に心がけておられることを教えていただけますか？

初めてピアノにさわる最初の一音から、脱力した状態で指が立つように子供を導いていきます。緊張すると何もできません。押し付けたり、ふらふらしたりしないようにもします。歩く(弾く)前に立つことができるように、指を安定させます。後になって脱力させようとしても、時間ばかりかかり、うまくいかないことが多いのです。建物の土台がぐらぐらしては上にどんな立派な装飾をこらした建物を建てても倒れてしまうのと同じです。

---ピアノをはじめた子供たちの目標はまず、脱力した状態で指が立つようになることですね。

そうです。指が立つようになって、それから、歩いたり(ゆっくりと弾いたり)、走ったり(早く弾いたり)できるように、指の独立を促していきます。ピアノを弾くには、指だけでなく腕も必ず使います。必要であれば、背中、腰、身体全体の力を出す必要があります。しかし、緊張してはいけません。脱力しなければいけません。弛緩してもいけないのです。この矛盾の統一をうまく導いていかなければなりません。演奏は、脱力すると、音質、音色がはっきりとし、音量が大きく出るようになります。一瞬のタッチによって音が響くことを生徒に徐々に理解させます。

---脱力した状態で指が立つようになるためには、どのように教えるのですか？

子供によって、指が立つようになる時期はちがいます。脱力すると指が立たなくなったり、指の形に気をとられ指を立てることに意識がいってしまい、緊張して脱力できなくなる子供が多

いんですよ。言葉で脱力を言いすぎると、子供はどんどん緊張していきます(笑)。リラックスしなければという緊張ですね。手が緊張している初心者は、こういった心理的緊張感からくることが多いので、教えるとき、子供の心理状態を注意しなければなりません。

脱力をさがすには、音楽のなかできれいな音を自分で探させ、簡単な曲の1つ1つの音をきれいに美しく導いていきます。表情に注意したり、きれいに弾くことを学ぶと子供は緊張を忘れ、自然に脱力した状態で弾くことができるようになります。これが、脱力をさがす一番いい方法だと思います。

生活の中からたくさんの例を挙げて脱力を教えることもあります。布巾でデスクを拭かせ、力を入れたりゆるめたりを繰り返させます。歩くときも緊張したままでは歩くことも走ることもぎこちなくなってしまうことをみせます。

自分の心をピアノの音と一体化させ、作曲家と会話しているように、ベートーヴェンを弾けばベートーヴェンと会話している……というようなことで心理的緊張を取り除くこともできます。

いずれにせよ、脱力した状態で指を立てさせるようにするには教師の導きが大切ですね。

---きれいで美しい音を、どうやって生徒に探させるのですか。

「聴く」ことを主にします。私は生徒に、響きのない音、押しつけた音を聴かせ、これらは良くないと指摘します。

次に、美しい音をだしたいという欲求を子供に育んでから、模倣させ、子供自身に「響きのある音」を実際に体感させます。はっきりと響く音は、脱力された状態で出すことができ、鐘の音のように空気の中で回転し振動していくことを子供に見つけさせます。なかなか自分で美しい音がだせないときもありますが、続けていれば必ずできます。

そして、子供に実践させてから、どうやって動作を行うのか具体的な方法を教えます。まず子供に大体の手の様子を感じさせます。指を落として、腕で指を動かし、アップダウンして、彼らに気持ちよさを感じさせるのです。

美しい音の感覚を持つことができると、自然に技術の上達をもたらしますし、上達のスピードもどんどん速くなります。音楽がきれいに聞こえることを生徒の心に印象づけることを目標にすると、生徒は頑張って練習するようになります(笑)。